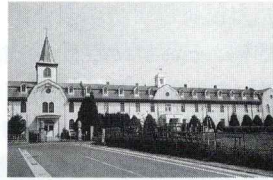


北辰

TOKYO

岐阜県立多治見北高等学校同窓会

東京支部会報 創刊第4号



平成4年4月1日

発行人 鈴木 満

第2回多治見北高同窓会 東京支部総会に参加して

山本康夫

(7回生 東京海上火災保険勤務)

7回生の山本康夫です。第2回多治見北高東京支部総会に仙台から参加しました。

以前、東京で開いていた7回生同窓会は小じんまりとした集いでしたが、さすがに1回生から31回生まで揃った東京支部総会はスケールが大きく、旧交を温めるだけでなく、多くの新しい出会いにも恵まれました。先生方や吉さんにもお目にかかることができ、すぐに頭の中はタイムスリップして、懐かしい高校時代に戻ってしまいました。

「私の北高観」を述べます。多治見北高という学校は、進学校でありながら受験対策の面ではかなり不器用だったと思います。私大の受験が始まる頃になっても、いくつかの授業は終わらないし、文系理系志望を問わず全員に数Ⅲ、物理、化学、世界史、日本史の受講を課しています。(現在は知りませんが) 当時私は受験に一生懸命だったので、北高のやり方には少なからず歯がゆさと不満を感じていました。

しかし、社会に出て教育というものをもっと巾広く考えられるようになると、むしろ変に受験技術指導に偏らず、高校生として必要な課目をきちんと教えるという北高の姿勢の方が、真の人材育成に結びつくということがわかってきました。さらに、北高をとりまく自然環境のすばらしさ、のびのびした人間を育てるのに預かって力があります。

現在の日本の教育に対しては、いろいろな角度

から批判がありますが、私は今こそ北高のような自由な校風の学校が多くなりさえすれば、比較的簡単に日本の教育は立ち直るような気がします。

大変な北高賛歌になってしまいましたが、高校生、中学生の子供を持つ父親として、しみじみ我が子を北高のような学校に通わせたいと思うこの頃です。

先日、両親の法事で帰郷した折には、妻と子供達を北高、修道院、虎溪山などへ案内し、自分の高校生活を大いに自慢しました。上記のような北高への想いは、社会へ出た卒業生の多くに共通していると思います。

きっと、既に、親子2代北高生というケースも出ているでしょうし、今後ますますふえてくるに違いありません。親と子、さらには孫まで、一緒に出席できるような将来の北高同窓会を想像すると、楽しくなってしまいます。

最後に東京支部総会にお願いを一つ。今回催していただいたイベントはすばらしい内容で、幹事の皆さまには、深く感謝申し上げます。今後もこ



▲名物だった伊藤吉おじさんも元気に参加いただきました。

のようなイベントを継続するとの方針が示されましたので、私はそれを期待する一方、逆にあまりそのことにとらわれる必要もないのでは、という意見を持っています。

同窓会に集まる人々はそれぞれの想いを抱いて参加します。その想いを一色に染める必要はないわけですし、大切なのは「北高OBという共通基

盤のもと、参加した人達が自由に交流できる場を提供する」ことです。特別な企画がなくても私は参加します。全員の近況報告だけでも十分な魅力です。どうか、同窓会の本質を考え、自然体での継続、発展をお願いしたいと思います。

ふるさととは遠きにありて

多治見北高校長
杉山 仁

どこの学校も、卒業生の活躍は嬉しいものである。すでに三一回生を社会に送り出した多治見北高も、多治見を中心とする郷土の地域では勿論のこと、東京や大阪など、全国的にひろがって、あらゆる分野で活躍している。

平成三年十一月十七日には大阪を中心とする西日本の同窓生が集まり、また同年十一月二十三日には、東京を中心とする地域の卒業生が、それぞれ「北高支部同窓会」を開いてくれた。

東京では、総理府参事官の職にある鈴木満氏(一回生)を中心に、官界、学界、芸術家、企業の部

一堂に会した第一線の芸術家は、次の諸氏である。

加藤祐英 陶芸家(四回生) 多治見より参加
長江慎二 画家(五回生)

宮田昌作 造形家(五回生) 在ドイツ

岩田実 彫刻家(七回生)

天野裕夫 彫刻家(十二回生)

佐々木悟郎 イラストレーター(十四回生)

コーディネーターの小栗幸夫氏(セゾングループ五回生)の司会で、それぞれ個性ある作品を持参されたり、スライドで写しながらの作品紹介をされ、高校時代やふるさとと自己の芸術活動との関わりについて、熱っぽい討論が続いた。加藤氏の日展での活躍、岩田氏の鎌倉市・東京での個展活動、佐々木氏の郵政省かもメールハガキのデザイン、宮田氏のドイツでの活躍など、その作品と創作活動は、全国的世界的で目を見はるものがあった。

本校側からは、小芝邦章同窓会長(一回生)、支部結成に力を尽した大角敏男先生(一回生より二六回生までを教えられた)、名物用務員だった伊藤吉おじさんらと、私ども関係職員が招かれたが本当に感無量であった。

多治見北高の使命は、「自主・自律・自学」の精神で、心身ともにすぐれた人物を育てて社会に送り出すことと考えている。難関極まる大学入試にも立ちむかい、体育系・文科系部活動にも全力をつくす生徒を育てている。本校から進学した東大生や早慶大生に、いわゆる「もやし」のような学生はいない。むしろ、「自然薯」(じねんじょ)のように泥が一杯ついていても、根の深い、ねばり強い人物が多く、これは「北高前史」に記録されている旧制多中の人々が、戦前汗水たらして整地して下さった運動場を、今も大切に使用してい



▲小栗幸夫氏(5回生)のコーディネートによる
カルチャーフォーラム

課長クラスなど約百二十名が集まったが、どの顔も生き生きとして現況を語り、青春時代をすごした緑が丘の北高と、ふるさと多治見について、懐旧の念を一杯にあらわして、口々にその想いを語ってくれた。

しかし二回目である今年の会では、単にふるさとを懐古するだけでなく、ふるさとのきずなを一層深める内容にしようという意図で、「陶都と自己」をテーマに、芸術家の卒業生による「北辰東京カルチャーフォーラム」がメインの行事として行われた。

るからかもしれない。

いずれにしても、ふるさとを遠く離れながらも郷土愛に燃え、つねに郷土とのきずなを大切にしている人々が、おそらくどの学校からも育てているにちがいない。

「大理石を彫りながら、私もこの石と同様万物流転の中にあるのだが、陶都の古代の人々のロマンのある心根につながっていると思う時がある」

(岩田氏)

「たまには多治見へかえろう」(加藤氏)など楽しくユニークな芸術家たちの語り口を聴きながら、私も作家の吉川英治氏が愛娘の結婚に際して送られた名句を借用し、同窓生のさらなる活躍を祈って帰郷した。

「菊根分け あとは自分の 土で咲け」

※この原稿は「東濃新報」より転載致しました。

友と語ろう

岩田敬子 (7回生 主婦)



「大変なお仕事ねえ。私には、とても出来ないことだわ。」

「仕事が大変なのは皆同じよ。私達、夜勤もあるけど、その前後はお休みになるし、子供を追っかけているだけで一日終わることもあるんだし、それほどでもないわよ。」

古き良き時代の武蔵野の面影を伝える雑木林を空っ風が音を立てて吹きぬけていくここ、所沢のT学園は、日本で唯一の国立の精神薄弱児施設である。ここで、二十年も先生をしているKさんは、北高時代と少しも変わらぬ明るい柔和な笑みをたたえながら、九万平方メートルにも及ぶ広い敷地の、中ほどにある施設を案内してくれた。

寮舎、訓練棟、作業棟、学習棟などを順に、気軽に声をかけながら、見せてくれたのだが、初めて接した園児達のしぐさや表情に、私は深い衝撃を受けた。と同時にここで働き続けている彼女や他の先生方に敬意の念を抱かざるを得なかった。園児達は存在そのもので問いかけてくるのだ。さまざまの意味で、これは大変な仕事だと思った。

Kさんを訪れることにしたもともとのきっかけは七回生による小さな同窓会である。某大学病院の看護婦長の職にある人、県の専門職で活躍している人、自営業の手伝いに忙しい人、子の受験に頭の痛い人等、七回生の東京支部の女性十数人の人生は、他の回生同様さまざまだが、何時になっても集まれば立ち所に十八才、しわは笑いじわに変えられて豊かな時が過ぎて行く。勿論、二十数年前の人物地図が、实地踏査によって大きく変わることもあるが、それもまた良いのではないか。お顔だけを存じあげていたような、今はご立派な男性諸氏と、旧知の間柄のように親しくお話がで

きるのも、同窓会ならではのことである。

同窓の友は各地に散らばっているが、去年の夏に、故郷で久しぶりに会った友のことも書いておきたい。「主人が学会とかで出張するでしょ。そんな時は一人でドライブするのよ。こんな田舎でたいした楽しみもないけれど、木を見るのが好きな。冬の間裸ん坊で寒そうにしているでしょ。それが少しあったかくなると待っていたように芽をふいてくる。木々が芽ぶくのをみると私うれしくなるの。春になってよかったわねえって言ってやりたくなる。特にまんさくの花が好き、早春の頃、ふと出かけたその時にまんさくの黄色の花を見つけた時なんか、うれしくて思わず笑っちゃうのよ。あんたァ、元気だったの、よかったわねえ、春になって、なんて話しかけたくなるのよねえ。」

彼女とは、小、中、高と同じ学校に通い、仲良かった。今でもお互いに名を「ちゃん」で呼ぶ合う仲である。なのに、私は彼女の事をまるで知らないと思わされた。深い感動と共に。こういう再会は、本当にうれしいものだ。田舎に帰ったら、季節を問わず、木々を眺めよう。そしてまた友と語ろう。今、しみじみとそう思う。

楽しく続いています

今井幸代（1回生）

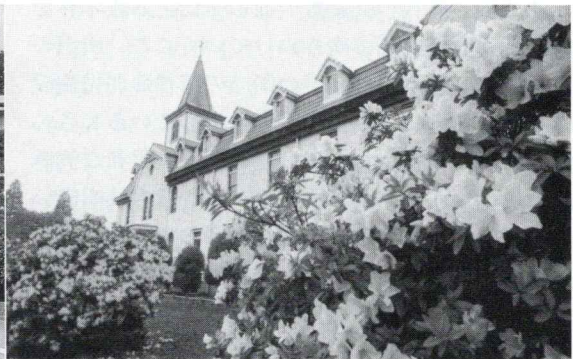
東京地区在住1回生の集い（愛称募集中）は、昭和59年に始まりました。北高卒業後20年余り、可児、鈴木、石田3氏が発起人となり、同窓会名簿より抜粋し、東京地区在住者（22名）の名簿を作成、第1回の集いを4月22日、ホテル国際観光にて開催しました。16名が集まり、懐かしい再会を喜びあう会となりました。

これを機会に集いを続けることになり、第2回60年7月ホテル国際観光にて12名出席、第3回62年7月池袋サンシャインプリンスホテルにて11名出席、第4回平成元年7月鎌倉にて7名出席と続き、平成2年に多北高同窓会東京支部が設立されましたので、その後は総会後の2次会として続いています。



昨年の総会には、多治見より小芝同窓会長、大阪より大村さんを迎え、鈴木、石田、奥村、中島、柴田、富田、田中、今井の10名が出席しました。2次会には新橋旬彩にて、諸先生にも出席していただき、2回生、3回生の方も一緒になり大いに盛り上がり、楽しい会となりました。

今年も大勢で楽しく集まりたいと思いますので、どうぞよろしく。なお、会の愛称を募集しています。素敵な名前をお寄せ下さい。



▲多治見北高正面玄関と春の修道院<写真はどちらも岩田実氏（7回生）提供>

原稿大歓迎!!

東京支部会員相互の、また、北高と会員との交流の「場」として、「北辰TOKYO」の内容を充実させていきたいと考えています。会員の方々からの投稿をお待ちいたしております。

〔応募要領〕

★内容……北高時代の思い出やエピソード、北高の近況、北高に望むことなど北高にまつわることのほか、携わっている仕事や最近起こった（または思った）事柄など会員の近況に関わること、支部の運営や活動、北辰TOKYOに対する意見・企画に関わること……etc 写真・イラスト付きなら大歓迎！（要するに何でも構いません。）

★宛先……〒160 東京都新宿区内藤町1-6
内藤町ビル2F

(株)ビジョンプランニング インターナショナル内
多治見北高同窓会東京支部

「北辰TOKYO編集部」

TEL 03 (3351) 8 8 1 1

住所などが変更された場合や名簿の記載漏れにお気づきの際には至急ご連絡を！

会員名簿の充実は、支部活動の要です。会員の皆さんの住所や勤務先、電話番号など名簿に記載されている内容が変更されたときや、東京周辺にお住いの北高OBの方で名簿に記載されていない方にお気づきになりましたときは、事務局に、ハガキまたは電話でお知らせください。